インドネシア人中等教育日本語教師を対象とした
日本語教え方オンライン自習コース「きらめき」の開発

今井智絵、村上奈未、杉島夏子（国際交流基金ジャカルタ日本文化センター）.

Developing an online self-study Japanese language methodology course "Kirameki" for high school teachers in Indonesia

IMAI Chie, MURAKAMI Nami & SUGISHIMA Natsuko, The Japan Foundation, Jakarta

要旨：2013 年の教育カリキュラム改正以降、インドネシアの中等教育では学習者中心の学習活動を通して生徒の 21 世紀型スキル等の能力を高める教育が重視されている。日本語教育においても教育方法の転換が求められており、教師教育は重要課題の一つであるが、新型コロナウィルスの影響で対面の教師研修が行えなくなった。そこで報告者らは中等教育の日本語教師向けに、21 世紀型スキルと学習者中心の教え方について学ぶオンライン自習コース「きらめき」を開発した。本発表ではその開発プロセスと概要、および運用からみえてきた課題と今後の展望について報告する。

キーワード：中等教育、オンライン自習コース、教師教育

1. はじめに

インドネシアの中等教育においては、2013 年の教育カリキュラム（Kurikulum 2013、以下 K13）の改正を受け、生徒の 21 世紀型スキル等の能力を高める教育が重視されている（古内他, 2017、国際交流基金日本語国際センター, 2015）。第二外国語としての日本語教育においてもこのような能力を育成するために学習者中心の教え方への転換が求められており、教師教育は重要課題の一つである。国際交流基金 (2019）によると、中等教育段階の学習者はインドネシアにおける日本語学習者の 92%を占めており、ジャカルタ日本文化センター（以下、JFJA）は、その教育を支える教師の支援に力を入れてきた。JFJA ではこれまで K13 に基づいた教材『にほんご☆キラキラ』の作成や同教材の教え方の対面研修を行ってきたが、研修時間が限られていることから教師らが事前に自習できる部分をオンラインコース化し、対面研修ではインタラクティブな学びに時間を充てるという構想をしていた。また対面研修でアプローチできないような、広域に点在している地域の教師の支援のためにもオンライン自習コースが有益であると考えた。

それに加え、2020 年 3 月から新型コロナウィルスの影響で対面の教師研修が実施できなくなったことから、教師らが自宅から学べるオンラインコースの作成が急務となり、オンライン自習コース「きらめき」が開発された。「きらめき」は、インドネシアの中等教育で日本語を教える高校教師向けに K13 や 21 世紀型スキルを取り入れた学習者中心の日本語の教え方を学ぶことが目的となっている。本発表では「きらめき」の開発プロセスと

コース概要、および運用から見えてきた課題と今後の展望について報告する。

2. 「きらめき」開発プロセス

同自習コースは、日本語専門家は日本から、インドネシア人講師はインドネシアからそれぞれ在宅勤務というフルリモートの環境下で開発が進められることとなった。Microsoft Teams や WhatsApp を活用し非同期でのコミュニケーションを図り、Zoom を利用して同期型オンライン会議を開催した。きらめきは 2020 年 4 月より約 4 ヶ月かけて開発された。4 月中旬の企画ミーティングでは 2 時間程度の同期ミーティングを 3 回実施し、コース全体の概要や扱う内容、Can-do などを決定し、それに基づいて 5 つのモジュールを作成することとした。その後、5 月から 6 月にかけて日本語専門家とインドネシア人講師がペアで各モジュールの内容を考え、動画やクイズを作成した。7 月には、作成したコンテンツを Google Sites にまとめ、講師が分担して確認したのち 8 月下旬に一般公開した。

コース開発に当たっては、JFJA でオンラインコースの作成経験がある講師のアドバイスを得ながら作成した。オンライン自習コースでも学びやすくするため、各モジュールごとに異なるナビゲーターをアバターと共に設定し、説明や指示をわかりやすくする工夫をした。また、アバターを設定することで親近感が出て、楽しく学ぶ手助けになる。Baker & Taylor (2012)においても、よりよいオンラインコースを開発するには、個人的なビジュアルを用いたアバターの利用や受講を歓迎するビデオの作成が必要とされており(p. 7)「きらめき」はこれに沿ったコースとなっている。

図 1： アバターの例

3. きらめきのコース概要

「きらめき」は 5 つのモジュール、16 の Can-do から構成されている。具体的な Can-do は表 1 に示す。5 つのモジュールは『にほんご☆キラキラ』の教え方の流れを踏襲したものであるが、他の教科書を使用している教師も学べるように配慮されている。モジュール 1 はイントロダクションとなっており、学習者中心や 21 世紀型スキルといったコースを受ける上で重要となるキーワードや授業での取り入れ方について学習する。モジュール

2 から 5 では各活動ごとの重要なポイントや学習者中心の授業、教師の役割について詳しく学習していく。各モジュールの学習時間は 2 時間を想定しており、全 10 時間のコースとなっている。

「きらめき」の受講にあたっては受講者は専用登録サイトから登録をし、その後自身のペースで受講をしていく。Google Sites には①モジュールの動画、②ワークシート、③Google Forms による確認クイズが掲載されている。受講者はワークシートをダウンロードし、モジュールの動画をみながら新しく学んだことや自身の考えを書き込んでいき、学習を進めていくこととなる。また各モジュールの最後にはふり返りとして確認クイズと Can-do チェックが用意されている。ふり返りまで終えると次のモジュールに進むという流れになっている。

受講者は各モジュールの最後にある確認クイズを行い、60%以上の正答率で修了となる。修了後はオンライン修了書が受講者に送られる。

表 1：16 の Can-do

タイトル	No.	Can-do
Modul 1 イントロダクション	Can-do 1 Can-do 2 Can-do 3	● 学習者中心の教え方と学び方を理解し、学生の視点から考えることができる。 ● 日本語を教える上での教師の役割を再考することができる。 ● 21 世紀型スキルを理解し、それらを教え方と授業に組み込む方法を考えることができる。
Modul 2 トピックの導入	Can-do 4 Can-do 5 Can-do 6	● トピックを紹介する目的を理解できる。 ● トピックの紹介の流れを理解できる。 ● 学習者中心の教え方における教師の役割を考えることができる。
Modul3 新しい言葉の導入	Can-do 7 Can-do 8 Can-do 9	● 語彙と表現の認識と実践の目的を理解できる。 ● 学習者中心の教え方における語彙と表現の流れを理解できる。 ● 学習者中心の語彙や表現の指導における教師の役割を理解できる。
Modul4 聞く活動	Can-do 10 Can-do 11 Can-do 12	● 聞く活動の基本的な流れを理解できる。 ● 学習者中心の聞く活動における教師の役割について考えることができる。 ● 聞く活動の目的を理解できる。
Modul5 話す活動	Can-do 13 Can-do 14 Can-do 15 Can-do 16	● 話す活動の目的を理解できる。 ● 話す活動の基本的な流れを理解できる。 ● 学習者中心の話す活動における教師の役割を理解できる。 ● 21 世紀型スキルを用いた話す活動で実践できるスキルについて考えることができる。

4. 課題

「きらめき」は中等日本語教師の関心を集めており、2021 年 1 月末現在 1205 人が登録をしている。また、登録者の内訳を見ると、中等教育に従事している日本語教師だけではなく、民間の日本語教師の登録も見受けられた。運用から見えてきた課題の一つとして、登録者に比べ確認クイズまで終えた人数が少ないことが挙げられ、登録後に学習に至って

いない可能性が考えられる。自習コースは学習を自分で管理しなければならないため、コース修了が難しい傾向にある。そのため、最後までコースを修了してもらうために更なる工夫が必要である。例えば、対面型のワークショップと組み合わせ反転型の教材として活用することで、修了者を増やすことができるだろう。それに加え、SNS を活用した定期的な宣伝を行ったり、教師会への出講時に紹介したりすることで新たな受講者を増加させるとともに、登録はしたものの受講や修了に至っていない受講者へのリマインドにもなると思われる。

5. 今後の展望

本稿では、インドネシア人中等教育日本語教師を対象とした日本語教え方オンライン自習コース「きらめき」について、開発の背景や方法、内容と現状について紹介した。今後の展望としては、大学の日本語教師養成コースでの活用が挙げられる。前述の通り、高校では K13 の教育課程で授業が行われているものの、大学の日本語教師養成コースでその考え方や教え方が取り入れられているかについては未知数である。学部生のうちから中等教育カリキュラム準拠の教科書に親しみ、学習者中心の教え方について知ってもらうことで、中等教育機関での教授にスムーズに対応することができるだろう。「きらめき」は、このように中等教育と高等教育を接続する一助になると期待される。また、インドネシア中等日本語教育では広域に点在する教師の支援も課題の一つである。日本語の教え方に特化したオンライン自習コースは、地域や所属先を超えて、今まで研修の機会がなかった教師への支援にも寄与しうると考えられる。

参考文献

Baker, C & Taylor, S.L. 2012. The Importance of Teaching Presence in an Online Course. Bart, M. (ed.). *Online Student Engagement Tools and Strategies. 6-8.*

古内綾子・三本智哉・五十嵐裕佳・八田直美・エフィ ルシアナ. 2017. 「インドネシア国家カリキュラム準拠高校教科書 『にほんご☆キラキラ』の開発 ー態度面のコンピテンシーの育成と日本語学習の統合を目指してー」. 『国際交流基金日本語教育紀要』 13, 87-100. 埼玉: 国際交流基金.

国際交流基金. 2019. 「インドネシア(2019 年度)日本語教育 国・地域別情報」 https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2019/indonesia.html (最終アクセス 2021 年 6 月 22 日)

国際交流基金日本語国際センター. 2015. 『21 世紀の人材育成をめざす東南アジア 5 か国の中等教育における日本語教育−各国教育文書から見える教育のパラダイムシフト−』 https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/research/five_southeast_asia/dl/report_j.pdf (最終アクセス 2021 年 6 月 21 日).